

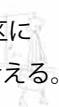
機能的な都市の真ん中に、誰かの居場所をつくる。

近代の都市開発の中で、日本の都市は機能面で劇的な発展を遂げた。しかしその姿は目的的で、画一的なものに帰着している。多様化してゆく人々の暮らしの受け皿として、望まれるのは深い懐のある居場所ではないか。大きな都市で、既存の建物や、道や、空地がそれぞれに、居場所として見つかるような表れ方と、それを表す建築のかたちを提案する。

PROPOSAL: 誰かの居場所



目的の集合である商業地区に
新たに価値を見出すことを考える。



目的を求めない場をつくる。

買い物の合間に、家に帰る前に、
ふと腰を下ろす。本を手に取る。

人の絵を眺める。緑を浴びる。

それはきっかけになる。



次の日、本の続きを読みに行く。

週末、並んで絵を描いてみる。

昨日のあの人に話しかけてみる。

それは暮らしになる。



みんなの居場所は、誰かの居場所の集合である。

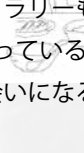
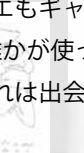
みんなのために、誰かの居場所をつくる。

本がある。キッチンがある。

アトリエもギャラリーもある。

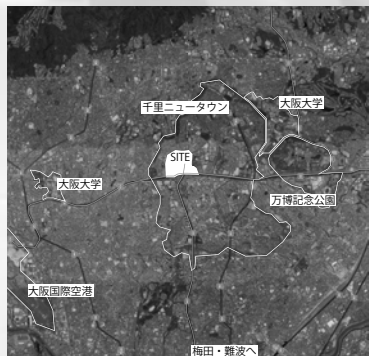
誰かが使っている。

それは出会いになる。

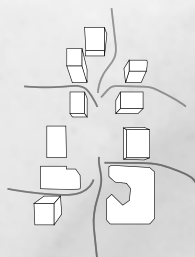
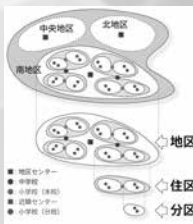


大きくてしずかな建築が
その居場所になる。

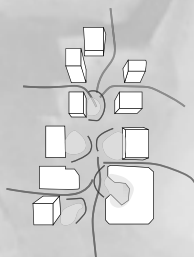
SITE: 過渡期を迎えた近代都市の商業地区



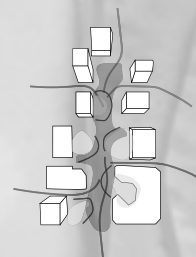
大阪は千里ニュータウンにある商業地区、千里中央地区を敷地とする。千里ニュータウンは、高度成長期に向かう日本を代表する都市計画の産物であり、近隣住区理論や歩車分離を採用し構成された都市構造に、核家族や小中学校を単位とした閉じたコミュニティ形成、機能性を重視した都市システムへの意識が見て取れる。大阪万博開催の後押しもあり、複数の公共交通を取り込みながら北大阪の中心とまで呼ばれるようになった千里中央であるが、商業のあり方に変化が起こり、暮らし方に多様性が叫ばれる現代において、商業地区としての中心性は過渡期を迎えていると言える。また、自動車のスケールでつくられた都市空間には、多くの余白が生まれている。



周辺の道を引き込む

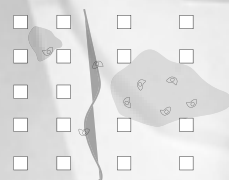


周囲と共に広場を囲む



かたちが表れる

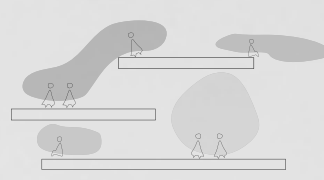
大きなかたちは、周囲の環境を引き込みながらゆったりとつくる。
細かな居場所は、建築の構成要素に空間性を頼り、無理なくつくる。



柱がつくる居場所

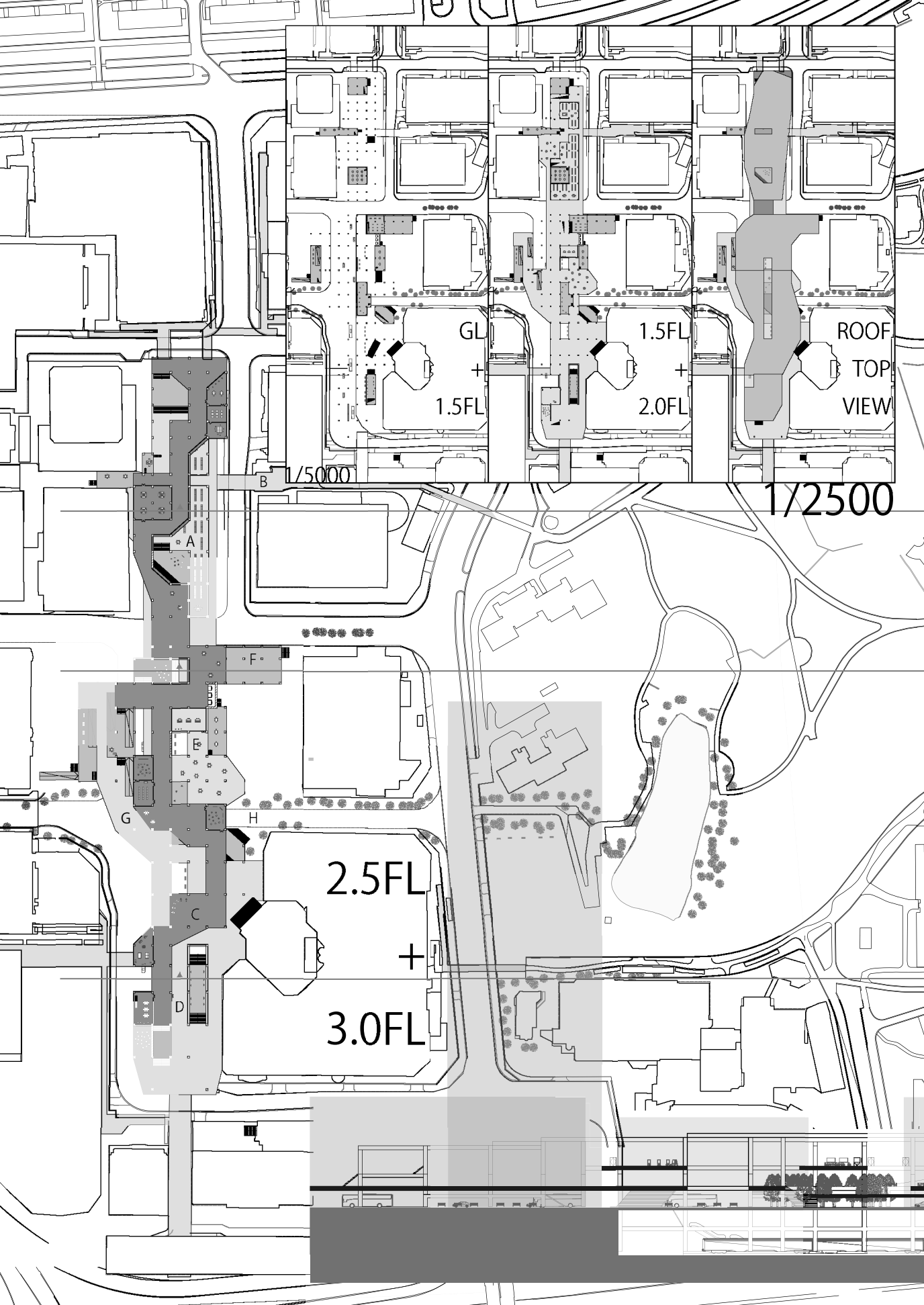


壁がつくる居場所



床と屋根がつくる居場所

DIAGRAM: おおらかな道と囲まれた場



GL

1.5FL

1.5FL

2.0FL

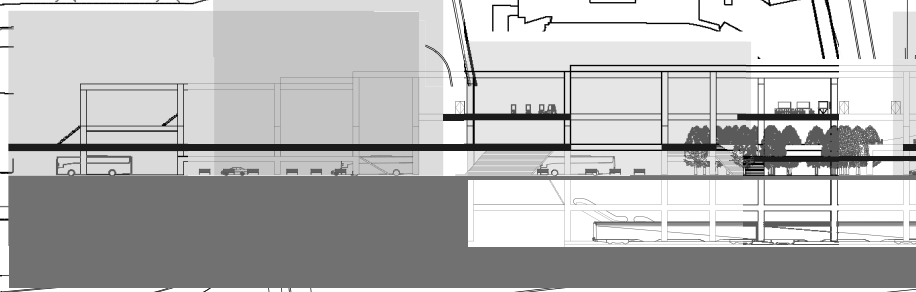
ROOF
TOP
VIEW

1/5000

1/2500

2.5FL

3.0FL



道と公民館を繋ぐ小さな溜まり場

いろいろな居場所のある図書館

1/1000

3層一体で利用できるホール

1/1000

細い道に沿うアトリエ通り

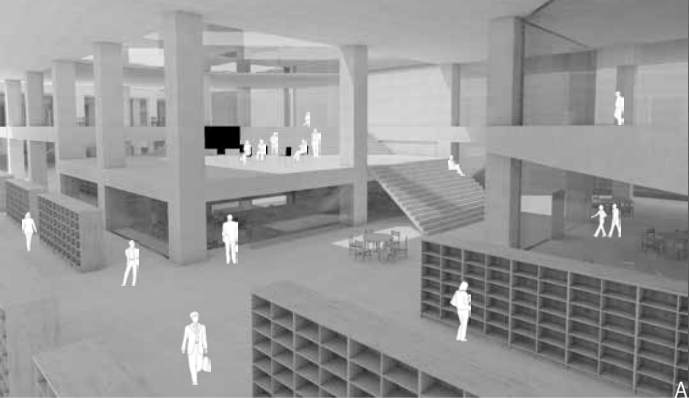
おおらかな乗り換え動線として利用されるギャラリー

1/1000

千里を結ぶ、ひとつながりの大通り

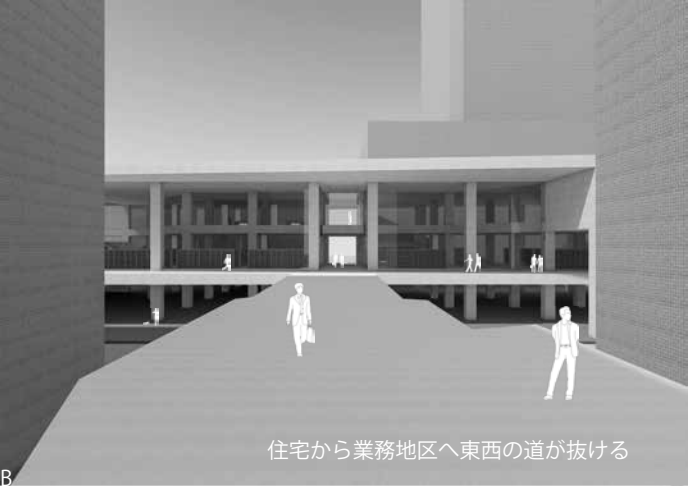
EAST SIDE 1/1250

2.5FL 踊り場に光が落ちるブックスペース



AB
CD

住宅から業務地区へ東西の道が抜ける



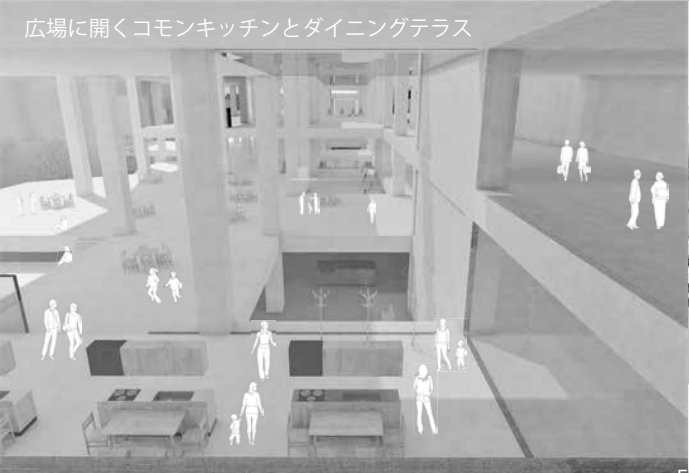
中心を抜ける視線で街の奥行きを感じる



3FL アトリエ通りからは周囲の活動がすこし遠くに見える



広場を開くコモンキッチンとダイニングテラス

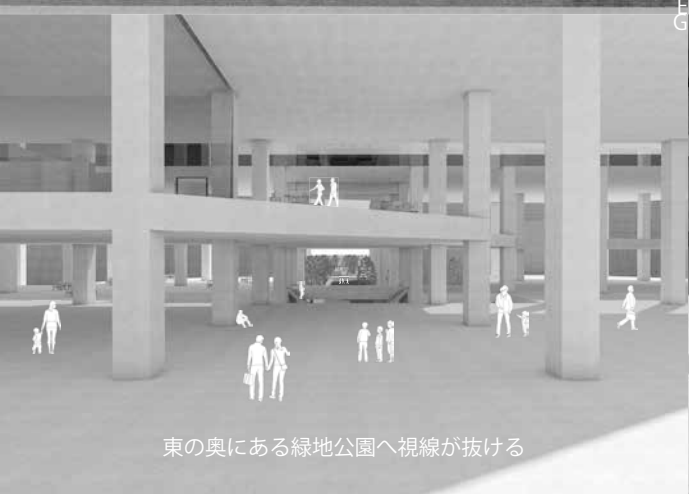


EF
GH

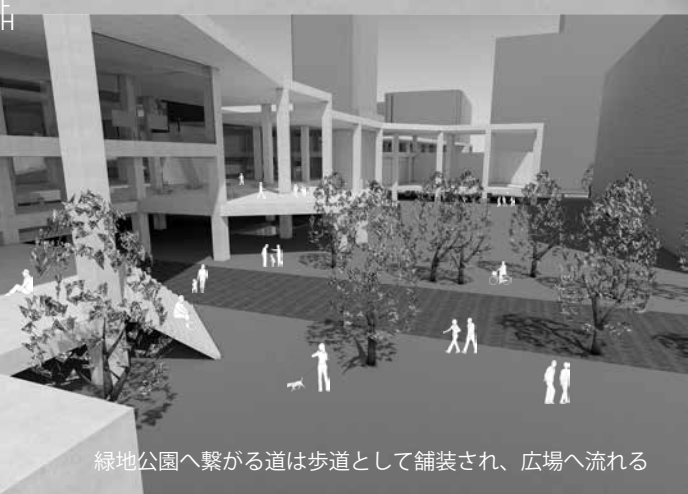
3層を繋いでレクチャースペースとしても
広場に向かうシアターとしても使えるホール



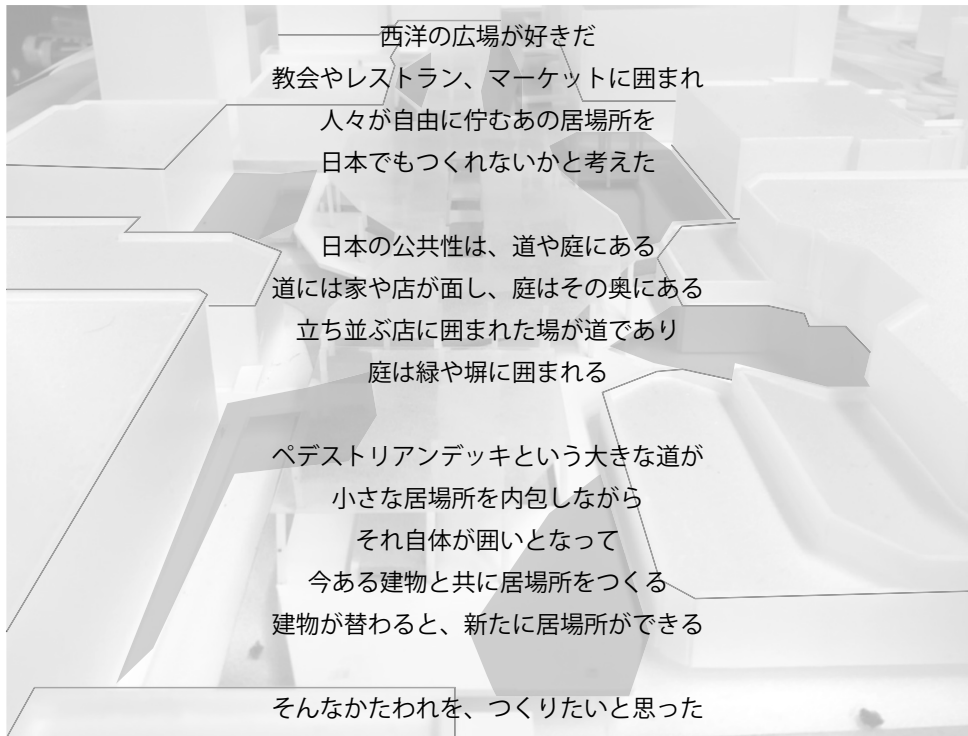
東の奥にある緑地公園へ視線が抜ける



緑地公園へ繋がる道は歩道として舗装され、広場へ流れる



建築のかたわれ



Special Thanks!!

Taichi/ Kensuke/ Shu/ Kaoruko/ Hibiki/ Marina/ Kana/ Mio/ Mitaka/ Kengo/ Ryogo/ Karen/ Hana and more.
